

登場人物



村田 新八
Shinpachi Murata

西郷に寄り添った生涯

幼いころから西郷隆盛を兄のように慕い、西郷が流刑の際には、連座して喜界島に流されました。明治政府では岩倉使節団の一員として渡欧。帰国後、西郷に従うため官を辞し帰郷。その後私学校設立に尽力し、西南戦争にて城山で西郷らと共に戦死しました。

西郷どんの足跡



私学校跡
— 鹿児島市 —

西郷と共に下野した多くの士族を教育するために作られた私学校でしたが、生徒の弾薬庫襲撃が契機となり西南戦争が勃発。薩摩軍は敗北し、同校は戦争後廃止されました。石垣には、激しい銃撃戦の跡を伝える当時の弾痕が残されています。

【住所】

鹿児島市城山町8

【問い合わせ先】

鹿児島市観光交流局観光プロモーション課
TEL099-216-1344

明治維新
150周年 &
西郷どん
放映!

2018年まで

あと 六十日

※2017年11月1日現在

次回「吉野台地の開墾」※予定



日本を支える人材を育てる私学校

新政府の樹立に尽力した西郷どんですが、政府内部で意見が対立し辞職。今回は、鹿児島に帰ってきた西郷どんが設立した私学校のお話。



歴史深掘り
ストーリー

本文：南九州歴史学会
画：KENRO
監修：徳永 和喜(西郷南洲顕彰館)

第4話

私学校の設立

官を辞し、故郷へ

幕末の日本を奔走し、新しい時代の幕開けを担った西郷でしたが、そんな彼の立場を一変させる事態が起こります。明治六年（一八七三年）、新政府内で起こった、朝鮮への使節派遣をめぐる問題（明治六年の政変）です。

当時、鎖国政策を行っていた朝鮮への対応をめぐって、政府内部で意見が大きく食い違い、激論が交わされました。その結果、西郷は自ら辞表を提出し、故郷鹿児島へと下野することになったのです。この時、西郷を慕って、桐野利秋・篠原国幹・別府晋介ら多数の薩摩藩出身の近衛将校が、一斉に下野しました。

またこの頃、徴兵令の発布などにより特権を奪われた士族たちは、明治政府への不満が高まりつつありました。その士族たちの不満を受け、西郷と同じく政府を辞した下野した板垣退助・後藤象二郎・江藤新平らを中心に、政府への反発の動きが全国的に活発化していったのです。

私学校設立へ

鹿児島に帰郷した大勢の士族は職もなく、うつくつとした日々を送っており、いっそう時世へ不満をため込む

さらにこの他に、高見馬場・高麗町・新屋敷・荒田をはじめとする市内各所に十二の私学校の分校が作られました。明治九年までには、喜入・宮之城・加治木・種子島などをはじめとした県内のすべての郷にも分校が設けられ、その数は百校を超えました。これらの分校は、旧藩時代の郷校の校舎を利用し、本校にならって学問や鍛錬を行いました。また、本校にも輪番で出席していました。

このように私学校は、県内において非常に大きな影響力を持つていくことになるのです。

日本を支える人材を

これら私学校において、西郷は特別な役職には就いておらず、直接的な学校の運営や指導には関わりませんでした。

ようになっていました。そこで西郷らは彼らを指導・統率するために、明治七年（一八七四年）六月、旧鹿児島城（鶴丸城）の跡地に私学校を創設しました。

私学校は主に、銃隊学校と砲隊学校、その他に、現在の照国神社南側に賞典学校、吉野寺山に吉野開墾社で構成されました。

銃隊学校は旧近衛歩兵を生徒として、篠原国幹が監督にあたり、また砲隊学校は砲兵出身者を生徒とし、村田新八が監督しました。銃術・砲術のほか、古代中国の歴史注釈書である「春秋左氏伝」や「孫子」など中国の兵書である七書なども学びました。

賞典学校は幼年学校ともいわれ、生徒は軍事訓練などを行いつつ、漢学・洋学・英語・フランス語なども学びました。そのため外国人教師をそろえて指導にあたられました。成績優秀者をヨーロッパに留学させる制度もあり、次の時代を担う士官養成を目的とした学校だったのです。

この賞典学校は、西郷・桐野らが明治維新の功績によって得た賞典禄によって創設され、西郷らが東京で創設した集義塾の後身として作られました。このような姿勢から、西郷の人材育成への思いが伝わってきます。

しかし生徒の多くが西郷を慕って集まっており、実質的な中心人物でした。西郷は自らの思いを、直接筆を執って「私学校綱領」として記し、各学校に掲げさせました。その内容は、共に一致し協力すること、義を重んずること、学問の本質として尊皇の心を持ち人民へ憐みの気持ちを持つこと、危機にあつた場合はその義務を果たすこと、といった鹿児島に脈々と受け継がれる精神を示したものでした。また、西郷は戊辰戦争における戦死者の霊をまつる文も書き、それを掲げさせました。いずれも、彼らの犠牲の重さ、また鹿児島島の精神を再確認することで、欧米列強と肩を並べるため、成長を求められている日本を支える人材を育てたい、という西郷の切実な思いが伝わってくるようです。